

マイブウ・メーノス (まあーまあー)の世界 ブラジル

ブラジルを訪問する人、ブラジルに関心のある人にお勧めする！！

梅津 久 記

第8話ーメチャ・クチャな労使関係 (その2)

一生雇用保障される

もう一つ今難しい問題になってきているのに、労働災害・健康障害がある、雇用期間中に労働者がなんらかの労働障害・健康障害を受けた場合、定年退職まで雇用を保障しなければならなくなっている。

この障害の中で特に難しいのが難聴(耳の聴感劣化)である、入社時に聴力検査を行い、問題のない人だけを採用するわけだが、年一回の健康診断で聴力の劣化が判明すると解雇出来なくなってしまう。各企業ではそれぞれ対応策を講じてはいるものの、なかなか簡単には解決されていない。社内では、耳栓を配り、配布時に本人の受け取りのサインをとり、教育、指導をして会社としてはきちんと対応していますという証拠は残しているのですが、会社の中だけの問題だけではなく、一旦仕事を離れると、街角には騒音公害が充満している。大型ミュージックシステムを使ってボリュームを最大に上げた、デスコテッカ(ダンスバー)、各種のパーティー等で、耳が割れそうになる音量のスピーカーの前で何時間も踊ったり、飲んだり遊び廻って耳が悪くならないはずがない。しかし残念ながらそれを検証する方法がなく困っている。解雇後、裁判所からの呼び出し通達で、「エー、あいつが」と“開けてびっくり玉手箱”である。弁護士によってあれやこれやと理由を付けて法外な補償金(たぶん本人は手にしたこともない金額)と再雇用を求めてくる。裁判官は「和解しますか？」と聞いてくるが、どっこい、そこはとことん戦うのが会社、負けたら控訴すればよい、何年かけても戦う姿勢を見せるのが会社である。

ちなみに私は長年オーディオ機器の製造・検査関係の仕事をしてきており耳は非常に良いほうで、ここ20数年はプレス、溶接等騒音の激しい製造現場に勤務しているが、今でも会社では聴力が一番良いほうである。しかしボリュームを上げた歪みの多いスピーカーの音にはすぐに頭が痛くなり、我慢出来なくなる為、パーティー等ではスピーカーから出来るだけ遠く離れた位置に席を取り、時間を見計らって、早目に退散している。一度友人の誕生日パーティーに招待されて行ったら、そんなに大きな家ではないのだが、玄関口の広場に数百ワットの大型スピーカーと照明を点けて「ドンドカ、ドンドカ」やっている、これにはたまらず、家の裏にある雨よけの屋根の下で簡単な食事をして「すみません、用事がありますので」と逃げるようにして帰ってきた思い出がある。

残業できない

さらに面白いことが法律で定められている、一日の労働時間が10時間を超えて

はならないということである。すなわち8時間の労働時間であれば、残業は2時間以上してはいけないことになる。ほとんどの企業が法律違反覚悟で2時間以上の残業を行っているが、これは労働監督局の監査がいつ入るかわからないというリスク覚悟で実施していることである。週44時間労働の規定に従って月曜から金曜日までは1日8,8時間の労働時間となり、残業許容時間は1,2時間となってしまうが、ほとんどの会社は法規制を無視した2時間残業をおこなっている。また時には必要に応じて4時間残業を行っている会社も数多くある。

また、残業代の割増金額も労使協定で驚くほど高く設定されている。月曜日から土曜日は60%増額、日曜日、祭日や振替休日出勤は8時間を限度として110%増額で8時間を越える場合は150%の増額となる。また、土曜日を月曜日から金曜日で振り替えている場合の、土曜日出勤は8時間まで60%増額、8時間を越え16時間まで80%増額、16時間を越える時間は110%の増額となる。このように他国には見られない高額な残業増額となっている。

これらの全ては、ブラジル奴隷制度の規制、または奴隷廃止を目的とした、がんじがらめの法律制定から発生した為と思われる、CLT(労働法大集)といわれる、つぎはぎ、追加だらけで百科事典の本の厚さ程のある法律によって規制されており、全体の見直しが迫られている。

労働組合員の特権

ブラジルの労働組合は会社毎にあるのではなく、従業員が強制的に参加させられる企業形体毎の労働組合形体である。

4年に一回の労働者シンジケートの役員改選も企業にとっては頭の痛いことである。なにが何時からどうなったのか正確にわからないが、とにかく役員の数65名ととても多く、そのためほとんどの企業から、2名、3名と立候補し当選する、この当選した役員にも4年間の任期とさらに1年と計5年の雇用保障が発生する。

また、これらの役員が労働組合の活動に参加する時に、労働組合から会社にたいして、委員の退社要請があれば、欠勤扱いせず退社を許可しなければならない協定が出来ている。

このように労働者を保護できる方法がいろいろあり、これがブラジルの労働市場の“マイゾウ・メノス”の世界です。将来どうなっていくのでしょうか。